(155) 栃木県日光市中三依の入山鉱山跡

栃木県日光市の中三依地域の鉱山を話題にしていると、岩友から「入山鉱山」についての資料を紹介された。参考文献（１）である。題名通り、旅好き、山好きの人の登山記である。中三依から荒海山への登山が１項目として記されていた。中三依地区から荒海山への登山ルートが、手書きの地形図で詳細に描かれており、東京からのアクセス方法、かつ交通費及び宿泊費も記されていた。が、よくよく見ると「浅草→新藤原　３円３６銭」、「中三依　一泊２円」と記されていた。１９９２年の出版年の登山記しにては金額がおかしい！！　本の内容を精査してみると、内容は戦前での登山記であった。８０年も前の。が参考文献の出版年は１９９２年である。この本の出版に少し事情があったようである。深入りはしない。ネットでキーワードで検索してみると、書籍は現在市販されている。従って、購入可能な本である。本探査記の資料として、この本中の登山図を複写掲載するのは、どうも著作権に引っかかりそうである。従って、ここでは掲載しない。興味ある方は、この本を探し出そう。

登山図には「入山鉱山合宿所」、「入山鉱山」の位置が銘記されていた。他に「入山鉱山」についての資料がない状況で、この登山図だけを手引きにして、現地の探査を行った。

探査の結果である。両箇所ともそれらしい痕跡は確認できた。と言っても、８０年以上も経過した跡である。今では、「痕跡」と言った方が良いかもしれない。明瞭な建物はなく、明瞭な坑口跡もない。更にズリ跡の確認もできていない。但し、現地付近で、黄鉄鉱であろう鉱物標本は採集できた。後半に標本として採集物の写真を掲載しておいた。

現地への経路は次の通りである。今市から１２１号を北上してきたならば、中三依地区で左側にある入山沢に入って行く。後は以下を参照。

探査日　　２０１７年１１月～２０１８年４月

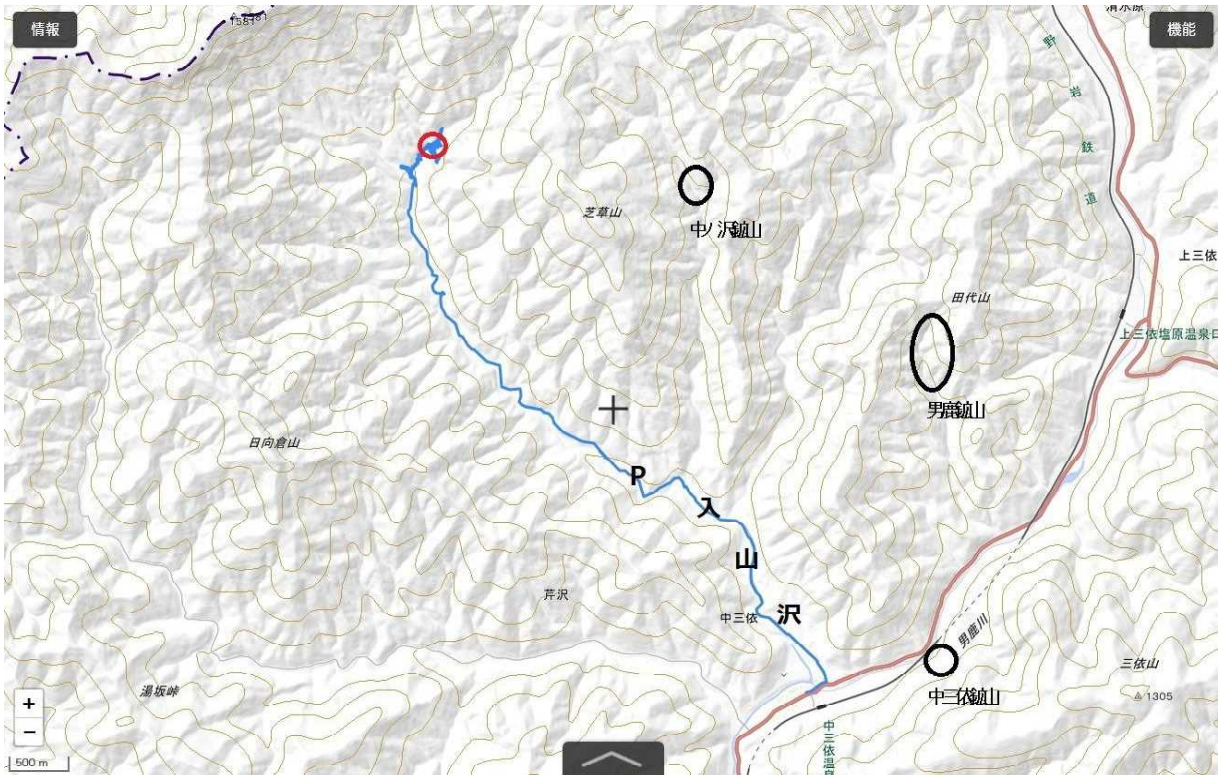

図１　青色曲線で中三依温泉駅から現地までのガーミンによる経路ログを示している。鬼怒川に沿った１２１号線を北上し、野岩鉄道の中三依温泉駅当たりから、北西方向に延びている入山沢に沿った村道に入っていく。Ｐは車を駐車させた場所。これより先まで舗装道路であるが、これより先は道は狭く、明瞭な私有地もある。容易にＵターンもできない。更に先では、道は沢側が崩壊し、徒歩でなければ先には進めない。多分道の補修はされることはないように思える。従って、Ｐ点付近で、林道幅に余裕がある箇所で、車を駐車させること。上流の赤丸付近が鉱山跡らしい。Ｐ点からこのところまでは約３ｋｍ。歩いて１時間弱か。沢は広く、道も広く、ほぼ平坦であるが、局所的に、数年前の集中豪雨の傷跡が残っている。このコースは良いハイキングコースでもある。なを、参考用として、本探査記に掲載しているこの付近の他の鉱山跡を黒丸で記入している。

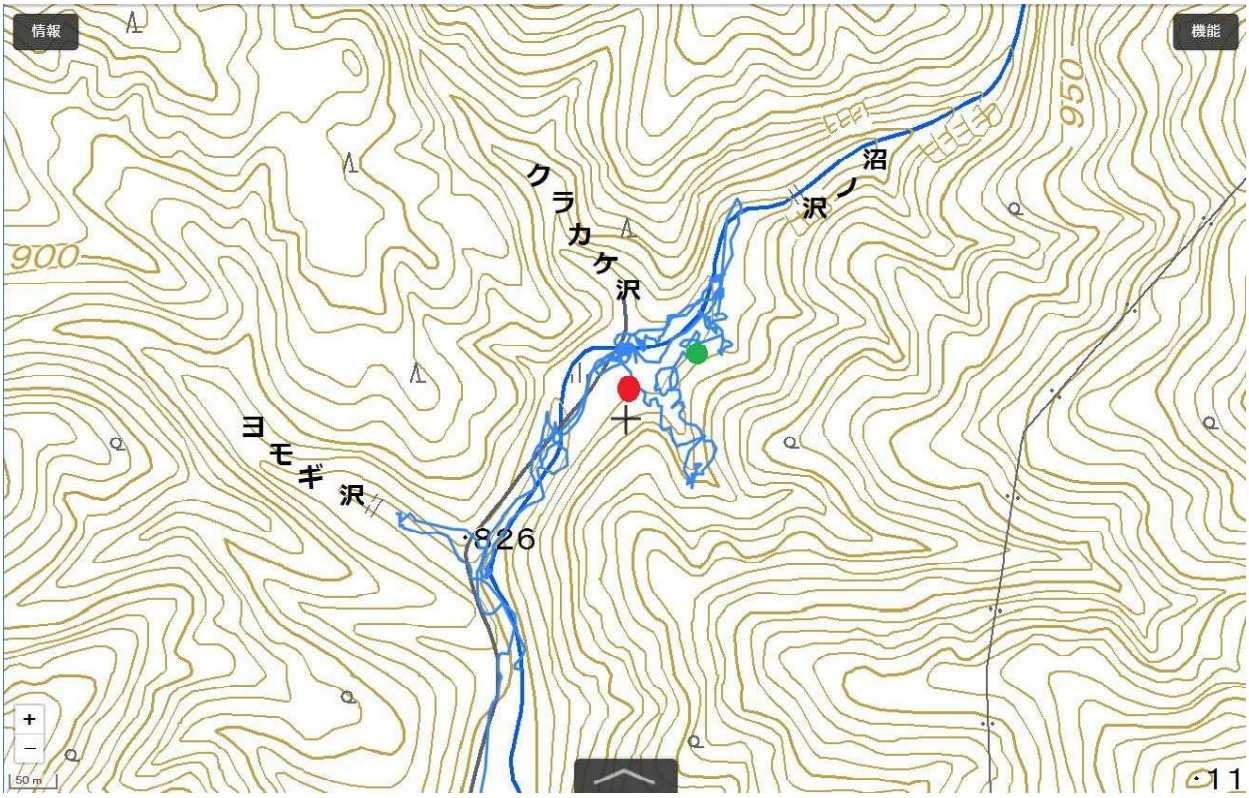

図２　図１の入山沢上流付近の部分拡大図。赤丸が石垣組跡。参考文献（１）に記述されている「入山鉱山合宿所」の位置とほぼ同じ。黄緑丸が崩壊した坑口跡と思われる箇所。参考文献（１）に記されている「入山鉱山」の位置とほぼ同じ。ここから２００ｍ～３００ｍ上流に、大規模な砂防ダムがある。図中の「沼ノ沢」の「沢」文字の所のダム記号の所である。一見の価値があるかも。このダムの１９９７年の建設時には、中三依の入口からここまで林道は立派に機能していたのであろう。もう２０年も経過している。林道は途中途中で寸断され、全く補修の跡も見られない。

鉱山跡写真

写真１　Ｐ点から歩いてきた。右脇にはロッジ風の民家があり、一帯は平地で私有地らしい。道脇にロープなどが張られて管理されている。この撮影時、左側は工事現場で会った。敷かれた鉄板と簡易トイレはそのためか。

写真２　写真１のところから少し先に進んできた。赤白縞コーンが、道の崩壊箇所を示している。

写真３　図２の赤丸の所。右側に石垣組があり、左側の立木には登山指導標が貼り付けられている。以下の写真を参照。

写真４　写真３の左側の近接写真。中央の木、高さ１ｍ半当たりに、「太郎岳登山口」と記された案内板。

写真５　写真３の右側の近接写真。しっかりとした石垣が見える。入山鉱山合宿所の跡か？　建物の基礎であったろうこのような石垣組は鉱山跡ではよく見かける。

写真６　図２中の黄緑丸の箇所。埋もれてしまった坑口跡らしい箇所。未だ雪に埋もれていた。雪が解けた時期に、再確認したいものである。近年林野の荒廃は著しい。保林する人がいなくなってしまったのであろう。立派な木が倒れたままになっている。

写真７　現地から少し上流にあった大きな砂防ダム。写真の左側には、ガード付きの「車道」（林道ではない）がダムの先まで延びている。ダム建設時に､開削されたものであろう、広くて立派な道路である。ダム上流は平らで広い沢となっていた。

採集鉱物写真

写真８　写真５で示した石垣組当たりで採集した標本。ハンマーで一撃。黄鉄鉱の微粒が散らばっている。貧鉱か、あまりリッチではない。

写真９　同上付近で採集。手に持つと比較的重い。これもハンマーで一撃。金色に光る部分が多い。写真８の標本より黄鉄鉱に富んでいた標本。

資料

図３　中三依付近の地質図にその近傍にある鉱山跡を記入したもの。岩友の作成したものに、若干加筆した。特徴的なことが見てとれる。流紋岩の岩相境界近傍に、ほぼ一直線上に各鉱山が並んでいることが。これらの鉱山の中で、八総鉱山は極めて大規模な鉱山であった。

参考文献

（１）「汽車が好き、山は友だち」、長谷川末夫、草思社、１９９２年。